代後期のもの乎。（渡邊）

新著紹介

○朝鮮の物産 善生永助編 調査資料第十九輯 菊判七三二頁 圖版六十七 朝鮮物産分布圖（二百五十萬分一）附 朝鮮總督府 二年三月

本篇は朝鮮に於ける物産の種類、性質、分布、生産、貿易取引等の狀態を明かにしたもので、總て十章より成る。第一章に於て物産の文獻と物産名の略解を行ひ、次に李朝初期、同中期、及同末期の三章に於て文獻に顯はれたる品物名を地方別に羅列して其の說明を與へ以て現代に於ける物産の依つて來る處を明かにした。第五章に於て明治四十三年併合以後大正十三年に至る生産の增加、貿易の變遷、市場の取引、消費の大勢を述べて現代に於ける産業の總說を爲すと共に將來に於ける産業の方針を知らしめてゐる。第六章以下は各說で農産物、林産物、鑛産物、工産物、水産物の主要な品目に就いて說明すると共に詳細な統計を澤山に揭げて居る。猶圖版中六十五は各産業の狀態を示したものであるが其の多くのものに所在地名を缺いで居るのは遺憾である。附圖の物産分布圖は嘗て朝鮮の商圈に附したものを改訂したもの、樣である之を要するに本書は寧ろ朝鮮の産業と題した方が適切なもので、朝鮮産業地理上の一大資料たるに足りる。若し夫れ近時に於て如何に朝鮮の産業が開發せられて來たか、又は如何なる新しい産業が起つて來たかを讀んで見ると朝鮮は決して昨日の朝鮮でないことを知ると同時に此の進んでゆくことの遠かな半島の人文地理考究がして見たくならぬ地學愛好家はあるまいと思はれる。（N）

○日本築港史 工學博士 廣井 勇 著 昭和二年五月、丸善發行 定價 五圓五十錢

廣井博士には、さきに築港前後二篇といふ著述があつて、工學上から見た築港及其設備の理論が詳述され、大に世に行はれてゐる。蓋し港灣學の權威といふべきである。しかるに今度は築港の歷史を尋ね商港論として、往時の手結、津呂、室津、浦戸、柏島、鹿兒島といふ六港について承應元年以後德川時代に行はれた西國の港灣について其設計の跡をのべ、更らに轉じて明治十一年の野蒜港、坂井港以下近代の築港四十八ヶ所につき最後は（大正十五年の小倉港まで）本邦內の商港は殆ど洩らす所なく之を說明批評されたもので啓發される所が多い。故に本書は明治時代以後の築港論と見て差閊がないそれより以前の築港史は、文獻の徵すべきもの極めて尠なく叙事まだ充分でないが。これは博士の專門以外であるから、之を求むる方が無理であらう。いづれ後論として漁港篇が出るとの事である。交通地理學の良參考書として推奬する所以である。（藤田）

○船舶史考　新村出著　京都、更生閣發行　非賣品

本書は新村博士の近著である。船の丸號と八幡船考と、蘭船エラスムス丸と貨狄舟、といふ三つの論文を集めて、船舶史考として出されたものである。從つて名は船舶史考であつて實は船舶史の一部であると見てよい。しかし日本の船乘りが中世に活躍した歴史を知るには、この上もない文獻である。丸といふ船の名の源流をしり、八幡船バンシの名稱の起原を學ぶ丈けでも、一般讀書子の大なる樂であらねばならぬ。裝訂も念が入つてゐるし、紙質印刷共に美はしい四六判二百頁未滿のいかにもこつた本である。（藤田）

雜報

○新に生れた米子市　昭和新政の劈頭たる、本年四月一日より新に鳥取縣米子町に市制がしかれた、これで全國の都市は現在百〇二を算する。

米子市は今を去る三百二十餘年前慶長六年、中村伯耆守が入國して一城市を形成してから町になつた、當初は加茂村と稱し海岸の一小漁村であつた、地名の起りは米生（ヨナフ）より轉訛したといひ、又は粟島長者が年八十八にして漸く一子を擧げたので世人之を奇瑞として「八十八の子」で地名米子と改めたといふ、現在の米子市は鳥取縣の西端に位し、東西一里一丁、南北一里三丁、面積〇・六哩餘である東北南の三方は豐饒なる西伯平野を繞らし西は中海に面してゐる、山陰線から境線及伯備線の出る起點で更に伯陽及米子の兩電車が本市を中心として近郷に敷設せられて山陰の商工業の中心地となつた、昭和三年度になつて、伯備線が完成したら、本市は益々盛んになるであらう。現在人口三萬一千百四十四人、戸數六千八百四十三戸である。

○安房線勝浦ー總興津間開通　昭和二年四月一日開通の延長六粁二六四米六の同線路左の如し

起工　大正十四年九月一日
竣工　昭和二年二月十五日
線路單線　軌間一米〇七〇
勾配　最急一〇・〇
曲線　最小半徑三〇〇米
築堤　總計一四五、四四〇立方米
切取　總計八七、五六〇立方米
橋梁五ヶ所　延長合計三八米一四二
溝橋　十九ヶ所
隧道　十二ヶ所延長一粁三一五米
停車場　鵜原、上總興津
用地　九二、〇〇〇平方米　軌道、第三種三〇瓩
工事費　一、〇七八、〇〇〇圓一粁當り十七萬二千圓

○本邦陶器界の現狀　大正十四年十一月第三回全國窯